3 月第 5 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 3 月 31 日（日）10：30～11：30　復活節第 1 主日
　　（イースター礼拝）
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：ヨハネによる福音書 20 章 1 節～10 節（新約 p209）
■説教題：「　週の初めの日　」
■讃美歌：323「　喜び祝え、わが心よ。」
　　326「　地よ、声高く　告げ知らせよ、　」

2024 年のイースターの朝を迎えました。今から 4 年前の 2020 年のイースターは 4 月 12 日でしたが、新型コロナウイルスの感染が拡大し、4 月 7 日に緊急事態宣言が出された直後でもありました。前任地の教会は関連施設として認定こども園がありましたので、厳重に感染予防対策をしたため職員の礼拝出席が限られました。そのため、イースターから 4 回の主日礼拝を中止しなければなりませんでした。おそらく立川教会では、その頃に対面での礼拝と並行して礼拝のライブ配信を始めたのではないかと思います。それから 4 年、私たちは各自で感染予防に気をつけながら、週の初めである日曜日には、対面での礼拝をささげることができています。それ以前には当たり前のこととしていわば習慣化していたかもしれない対面での主日礼拝が、細心の注意を払いながら真剣にささげるものになっていることに気づかされます。

さて、ヨハネによる福音書の第20章1節から10節に入ります。主イエス・キリストの復活を語っている箇所で、他の3つの福音書にも同様のことが記されています。1 節は「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。」と書き出されています。主イエスは金曜日の午後に十字架の上で死なれました。ユダヤの暦では日没から一日が始まりますから、日が暮れたら土曜日となり安息日となります。ですから、主イエスの遺体は安息日になる前の日没前に急いで墓に葬られました。そして、安息日の日没からは次の週の初めの日の日曜日となります。その日、夜明けのまだ暗いうちに、マグダラのマリアは一人で主イエスの墓に行ったのです。本日の聖書箇所の少し前のヨハネによる福音書19章25節,26節に「25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。26 イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。」と記されています。主イエスの十字架の死の時、そのそばに彼女とヨハネによる福音書のみに特別に「愛する弟子」と記される人物も立っていたことが分かります。マルコによる福音書とルカによる福音書では、墓に行ったのは何人かの女性たちだったと記され、彼女たちは主イエスの遺体

に香料を添えて丁寧に埋葬をし直すために出かけたと説明されています。しかし、ヨハネによる福音書では既に金曜日のうちに丁寧な埋葬がなされていますから、その必要はないのです。マグダラのマリアは、主イエスを深く愛し慕っていました。だからその葬られた墓で涙を流しつつ、主イエスの思い出に浸りたかった、だから、一人でまだ暗いうちに墓に出かけた、とヨハネによる福音書は語っているのです。それは、この後の11節以下で、彼女が墓の前で復活した主イエスと一対一で出会ったという重要な話の伏線となっているのです。

しかし墓に行ってみると、その入り口に置かれていた大きな石が取りのけてありました。当然のことですが、彼女は墓の中を覗いて主イエスの遺体がないことを見たことでしょう。それで彼女は驚き、シモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行ってその状況を告げたのです。それを聞いたこの二人の弟子も、主イエスの墓へ走って行きました。彼らが墓に入って見ると、そこには、埋葬の時に遺体を包んだ亜麻布が残されていただけでした。これが、本日の箇所に語られている、主イエスの復活の日、イースターの日の出来事の始まりです。ある方は、これらの出来事が、三人の人たちの「見た」「走った」という行動によって語られていることに注目しています。私自身も、今回４つの福音書の復活を描く箇所を読み比べてみて、ヨハネによる福音書の描くその行動のみが非常に力強く印象に残りました。本日は読みませんが、ヨハネによる福音書では、この出来事の後で先ほどお話ししましたように、マグダラのマリアが一人で主イエスに出会い、「わたしは主を見ました」と主の復活を宣べ伝える者へと変えられていきます。一方、マグダラのマリアから墓の状況を伝え聞いた二人の男の弟子たちは、お墓の状況については「来て、見て、信じた」と記されています。けれども、9 節,10 節に「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10 それから、この弟子たちは家に帰って行った。」と記されており、必ずしも良い方向へと歩みが変えられたとは記されていないのです。しかし、ここで記されている「まだ理解していなかった」という表現は、悲観の言葉ではなく希望の言葉であると受け取ることもできると言われています。ある方はこの箇所について、「『信じた』というところに、復活信仰の萌芽があり、始まりがある。人間の信仰は不確かで、曖昧である。信じたその時にはまだ分かっていない。それでもいいのである。分からなくてもいいのである。信じることから人生は始まり、やがてすべてが分かる時が来るのである。」と語っています。

主イエスの復活の出来事はこのように、見聞きした者の心を大きく揺さぶり、走り出させます。主イエスが墓に葬られたままだったら、マリアは墓の前で泣くことによって、次第に慰めを得ていき、やがて主イエスの思い出を大切に抱きながら生きて行ったでしょう。二人の弟子たちもまた、家に帰り以前の生活に戻っていくというところで留まっ

てしまったかもしれません。しかし、主イエスの復活の出来事は、それ以前の彼らの生活から主なる神様が示してくださる方向へと喜んで走っていくものとして押し出してくださるのです。今もその力は働き続けています。なぜなら、私たちは今日もまた、主イエスの復活なさった日曜日にこの礼拝に招かれ、よろこんで賛美をささげているからです。そのことが、主イエスの復活を私たちに告げ知らせる何よりのしるしであると確信しています。